

たのです。

七歳のときに、家族とわかれて横浜の養家にもらわれてきたかし子は、生活のちがいになかなか慣れることができませんでした。あまりじょうぶでなかつたかし子でしたから、

「ご飯をいっぱい食べて、早くじょうぶになっておくれよ。」

と、山盛りに出される白いご飯も、かし子にとっては胸がつかえるばかりでした。そのころの貧しい会津の家では、雑炊が毎日食べられればよかったです。栄養があるからといって、生卵をすすめられるのですが、あの、どろっとした卵を見ると、かし子は、はき気がしてきます。かし子からだにはあわなかつたのかもしれない。

「また、卵を残したの。こんな栄養のあるものを残すなんて、もつたいないじゃないか。」